

今尾恵介著 『地図帳の深読み 鉄道編』

(帝国書院)



出版社の帝国書院、中学や高校の頃、地理の授業でお世話になった地図帳の会社と聞けば、ピンと来るだろう。

さすがは地図帳の本来、明治から令和まで豊富な地図を活用しながら、等高線の密度や塗り分けられた色などをたよりに、どうしてここを鉄道が通ったのか、なぜここじゃなきやダメだったのかを、地図大好き人間の今尾恵介さんが教えてくれる。確氷峠のアプト式鉄道、丹那トンネルや青函トンネルのルート選択や阿蘇のZ型スイッチバックなど、敷設される前と現在の地図を比較しながら、なるほどと思える解説が続くほか、鉄道から見えてくる外国の姿といった海外の鉄道のことまで載っており、まさに読むブラタモリ！といった感じ。地図を俯瞰して解説を読み、また地図を眺めると読み進める至福の時間！お薦めです。

ただし、教科書くらいといった大きさのこの本、紙も厚めでしっかりとっています。寝転がりながら読んでいてうっかり顔の上に落とそうものなら……、痛かったです。お気をつけて。

(小倉 敬)

ライブ「ONE OK ROCK 2023 LUXURY DISEASE JAPAN TOUR」

(2023.2.4 @PayPayドーム)



立春の日はロックバンド「ONE OK ROCK」通称「ワンオク」ライブへ。この三年、新型コロナウイルス感染症予防対策として、活動自粛要請が発出されていたイベント業界。今年になってようやく観客収容百パーセント可となり、この日PayPayドームは三万人超の人々の熱気に満ち満ちていた。

ワンオクは日本発世界基準のロックバンドで、特にヴォーカルのタカの評価は高い。両親は森進一、森昌子であるからそのDNAの威力は推して知るべしではあるが、どこまでも突き抜けてゆくハイトーンと地鳴りのような低音部、正確なピッチや吟遊詩人のようなリリカルな歌唱法など、二時間余りのライブ中に彼が見せてくれたパフォーマンスは(あえてこう言わせていただくけれど)アフターコロナの幕開けを宣言するにふさわしいものだった。

コロナ禍により、活動できない時間が長かったミュージシャンと、ライブ開催を待ち望んでいた観客、その両者の熱い思いの圧がぐっと押し寄せてくるような珠玉の時間。ライブってやっぱり素晴らしい。

(藤野早苗)